

がんばる姿を、多くの人に伝えたい

法学部 福田成幸

今年1月2日、箱根駅伝往路。朝、大手町で出走の写真を撮影し、電車とバスを乗り継ぎ、中大優位のラジコを聞きながら、3時間かけて箱根湖畔に到着した。ゴールまで2時間もあるのに、すでにゴール付近は、

各大学の応援団が準備を終え、沿道は大変なにぎわいだっただけ。

大急ぎで、ゴールの撮影ポイントへ。2列目になってしまったが、1列目のおばさんに「孫が明治大学で

走っているのよ」と聞いて、「それじゃ、中大がゴールするときはぜひ」と、1列目を譲ってもらうことに成功した。

東京の人は知らないだろうが、箱根は、大雨。傘がない。これまで経験したことのないほどの冷たい雨が、全身の体温をごっそり奪っていく。濡れて、待ち続けて、1時間半。

「第1位の順天堂大学の今井君はゴール前、5キロのところを走っています……」と会場のアナウンスを聞いた後は、記憶が薄れていく。風邪を引いたか、頭痛もしてくる。そして、なぜか——上空から眺めている自分の姿が脳裏に浮かんだ。

「写真がうまく撮影できなかったら、掲載されないし、時間かけてここまで来た自分の努力も水の泡。風邪を引いているようだし、早く帰った方がいいんじゃない」
「悪魔のささやきか聞こえる。」

しかし、同時に、「自分は何のために、今、こうやって、極寒の中を待ち続けているんだ。その答えは何だ……」という問いも聞こえてきた。人だかりが一段と大きくなり、身動きがとれないなかで、ひとり学生記者生活を初心に戻って考えてみることにした。

——大学2年の春、「いろいろな人と会ってみたい」と駆け込んだ「Hakumonちゅうおう」編集室。先輩たちには、「こいつはちよつと違う」と思われつつも、いままで150人以上を取材し、14本の記事を掲載してきた。そして3年間で、当初の取材する「怖さ」も「楽しさ」に変わり、編集長の「文がカタすぎる」という評価も「肩の力が抜けてよくなった」という成長(?)をとげた。

順風満帆に取材できていたとはいえず、2晩徹夜で書いた記事がボツになったり、取材中に相手を怒らせたり、時にはOBから1時間、大学の経営方針についてご叱咤いただいたこともある。
しかし、学生記者経



最後の「激撮」…芦ノ湖に3位ゴールする中村和哉選手=06年1月2日

験としては、満足できる感想が大半である。小学時代以来の憧れのサッカー選手、引退した「ミスター・レッズ」福田正博選手インタビュー(03年秋季特別号)をはじめ、水泳百・自の日本記録を持つ細川大輔選手(05年早春号)、国際海洋法裁判所判事に就任した柳井俊二法学部教授(05年秋季特別号)……年齢も分野も違うOB・学生・教授らと会って話し、本当に多くを学んだ。そして、編集された掲載誌を学内や通学電車内で多くの人に読んでもらう姿を目の当たりにし、その嬉しさも知った。事実、今年届いた高校時代の恩師からの年賀状にも、「Hakumon



柳井俊二法学部教授(右)インタビューのあとで=05年9月、中大ロースクール

ちゅうおう」を読んだよ、と一筆したためてあった。

今度の箱根駅伝で、気づいたことがある。なぜ自分は記事を書いているか。究極的に、「一生懸命頑張っている人の姿を、より多くの人に伝えたい」からこそだ、と体力の限界のなかで気づいたので。今年の箱根駅伝は、確かに往路3位、総合8位と振るわなかった。しかし、駅伝選手たちは、この日のために大学生活をかけて走ってきた。メディアは結果重視だが、そこに至るまでに、数々の感動がある。自分は、それを少しでも多くの人に伝え、何かを感じとって欲しい……と(05年ハコネは春季号で大特集した)。

幕末の日本で、国内初の新聞を発行し、近代化に貢献したジョセフ彦は、「記事は事実を正しく民衆に伝える

全身「コチ」の初取材、 のメッセージ

4年前のちゅうおうどころ、大学入試の真ただ中にいたなんて、遠い昔のように感じられます。そして、あのころは想像もできなかったよう

事を第一とし、そこに感動が生まれる」という言葉を残したが、わずかにその意味を理解できたような気がする。

取材を通じて、「自分に納得して」「全力投球」の仕事をするこの面白さを学んだ自分は、進路として、公務員を選択した。自治体の職場にあつては、説明責任を徹底して、多くの人が活躍し、一生懸命頑張っている人がより活躍できるフィールドを作っていきたい。

きょうもどこかで、学生記者は活動している。ぜひ、お見かけの際は、応援してあげてください。今後とも「Hakumonちゅうおう」をこ愛読のほど、宜しくお願いします(このへんのフレーズがカタイと言われる、かな?)。

「キャンパスNOW」 理工学部 橋本奈緒美

な自分の姿が今、ここにあります。

私にとって、文系理系合同のサークルに入ったことが、この4年間を密にすることにつながりました。考

'06年春 最後の〈私〉

え方から生活まで、文系と理系というのは本当に違うところが多いのです。だからこそ、お互いのことを分かっただけなければならぬ、それができると本当に深い仲につながっていくんですね。

そんなことを多くの人に伝えたくて、学生記者になって「キャンパスNOW」などの記事を書いてきたわけですが、うまく文章を書くことができずに、十分に伝えることはできなかつたかもしれません。しかし、私の文章を読んでくれた方が少しでもいたら、また欲をいえば、言いたかったことを読み取ってくれた方がいたら幸いだなと思っています。匿名のインシヤルをバラしちゃえば、(走)でした。

理工学部の西田治文教授(生物学)インタビュー(03年夏季号に掲載)も忘れられない思い出です。2億5000万年前、ペルム紀の化石から絶滅植物である「グロソップテリス」の「精子」を発見したというニュースイチヨウなど裸子植物の受精過程が明らかにになった貴重例として、科学



陸上サークルの合宿で、OBと一緒に。右・橋本=04年夏、永野

誌「ネイチャー」に掲載され、日本古生物学会学術賞を受賞されました。興味深く、聞きたいことは山ほどあったのに、コチコチ。理工学部と一緒に学生記者になった原田成さんともども、これが初めての取材体験だったのです。原稿にするのにも苦労したけれど、掲載された「理工学部発のニュース」を読む感動はひとしおでした。

3年、4年と学年が上がるにつれて忙しくなり、記事を書くことが難しくなってしまうのが心残りです。私は卒業後、大学院(応用化学研究科)へ進学します。

小さな頃からの夢、研究者への道のスタートラインにようやくつくことができた気分です。

大学院は2年間と短いですが、自

自転車の快感——立ち止まらない、前へ前へ

総合政策学部 阿部恭子

大学に入学してからというものの、私が自己紹介をするとき欠かさず登場するようになったのは、相棒の自転車のことである。17歳の誕生日プレゼントにと、欲しくもないのに、母親から無理やり与えられた自転車は、歓迎されることなく2年間ほど家の片隅に眠っていた。宝の持ち腐れだと散々文句を言われ続け、大学

分のやりたかったことができず、貴重な2年間。1日1日を大切に、できる限り多くのことを吸収していきたいと思っています。

が近いこともあって、渋谷通学に乗り始めたこの自転車。今では私の人生に欠かせない相棒となった。自転車で行けば、大学まで15分の通学とはいえ簡単な道ではない。中央大学は丘（山?）の一番上に存在するため、坂道が到着するまでつづく。見上げるまでも見上げて目

は上り坂。2年生からは自転車サークルに所属しはじめ、国内や海外を走り始めるようになった。

私がこれほどまでに惹きつけられるのは、もちろんその風をきる爽快感もある。思いつ

サークル仲間と北海道・オロフレ峠山頂へ。右・阿部=04年夏

て見上げて目

'06年春——学生記者最後の〈私〉ニュース

きりペダルをこいで、一人、二人と人を抜いていくあの心地よさ。車よりも早く、巧みなハンドル操作で駆けおりの山道は思い出すだけで興奮してきてしまう。そんな時、普段ののんびり屋の私はどこかへ消え去り、まるで別人のように目をランランとさせ、狂喜してペダルを走らせる。普段の私しか知らない人が見たらちよつと怖いかもしくないくらい、それは快感をあたえてくれた。それから、ひと山登り終えたあとや合宿やレースなどで目的地にたどりついたときの達成感も忘れられない。

ビールがのどをくぐると突き抜けていく。ビールがおいしいと思ったのは自転車に乗り始めたからだ。

しかし、自転車に乗り始めて得たもので何にも替えが得たいものは、自信だと思ふ。高校生までは人見知り、恥ずかしがり、人前になるとすぐ顔が真っ赤になっ

てしまっていた私が、自転車を通して、もう自分を隠すことなく自信を持つて私らしくあるようになった。今では、見たことも訪れたこともない土地を、地図を頼りに旅して、テントを張り、パンク修理をし、進んでゆく。

立ち止まらない、後悔しない、前へ前へ！ これは私の信条だが、自転車との生活でも同じことがいえる。道はつながっている。だから新しい景色や人々との出会いを想い、きょうもひととき、ふたとき。中大付近を自転車で一生涯命かけている元氣娘がいたら、それはきっと私のはず。声をかけてもらえる喜びます。

学生記者の仕事の中で最も楽しかったのは言葉を編み出していく過程、そしてさまざまな人との出会いだった。中でも一番憧れていた中沢新一教授の取材ができたときは、小躍りをしてしまうほど嬉しかった。それに、恋文を綴るように一生懸命書いた原稿を褒めていただいたことは大きな自信につながった（04年夏季号）。

卒業後は臨床心理士を目指し、指定大学院入学のための勉強に励む。勉強の合間にも自転車の旅は忘れません。夏に中欧を旅する予定。

